

オナガドリの種類



白藤種

当初は小国鶏から作られました。明治までは、肩、首の周りに茶色、黒色を有する五色(羽が白、黒、緑、黄、褐の五色に彩られていた)と呼ばれる小国系の鶏でした。地元の野村金蔵は、純白に近い白色に改良しました。明治二十年ころ茶色系が無くなり、現在の白藤種ができあがりました。

白色種

明治中頃、小国鶏からの突然変異として作られたと言われていますが、地元では白色レグホーン(雌)らしき鶏に白藤種を交配したとも言われています。白色レグホーンとの交配では容易に尾長性のある鶏ができないことから白藤種を改良したのではないとも言われています。



褐色種

明治時代に入り土佐山田町の篠原兼三によって、白藤種と東天紅鶏を交配して作られたとされます。また小国鶏から五色鶏として褐色種ができたとの説があります。しかし、戦時中この種は絶滅しましたが、地元では東天紅の雄と白藤種の雌を交配して再現しました。白藤種を優性、赤笹色を劣性とした伴性遺伝なので比較的容易にできあがります。



オナガドリの由来

昔土佐藩主山内公が飛鳥という槍飾りに用いる長い鶏の尾を、藩内の農民から集めることとなり、篠原(今の南国市篠原)の住人武市利右衛門が苦心改良の結果、二代藩主忠義のとき、みことなオナガドリを作り出すことに成功しました。これがオナガドリの原種白藤種の始まりであるとされています。伝説では地鶏とキジや山鳥と交配して作ったとなっていますが、正確な記録がないため、よくわかりません。

その後、多数の愛鶏家によって絶えず研究改良され、換羽期になっても雄の尾は換羽しないで死ぬまで伸び、10m余にも達するようになりました。明治初年に褐色種、更に同二十年頃白色種が作り出されて現在の三種類となりました。寿命はおよそ八年〜十年。伸びる程度は鶏により、管理によって多小の相違はありますが一ヶ年約〇、七m位で、換羽のとき抜けないため年と共に長くなり三年もたてば約二、五m程のみことな尾となります。



特別天然記念物

大正十二年三月に天然記念物土佐の長尾鶏と指定され、昭和二十七年三月に特別天然記念物「土佐のオナガドリ」と改名し、指定を受けています。

